

## 「新潮 45」休刊について

『杉田水脈論文』に端を発した、LGBT 問題をめぐる「新潮 45」の数々の寄稿、そのあまりの差別的な内容に対して世間からは厳しい非難が殺到し、それに押しつぶされるようにして「新潮 45」は休刊を決めた。

『ここ数年、部数低迷に直面し、試行錯誤の過程において編集上の無理が生じ、企画の厳密な吟味や十分な原稿チェックがおろそかになっていたことは否めません』

新潮社は『「新潮 45」休刊のお知らせ』でこのように、一連の騒動の原因を認めている。

つまり、今回の休刊問題は「新潮 45」のずさんな編集体制からこぼれ出た駄文に関わる騒動であり、それは、二つの問題に分かれている、と私は思う。

すなわち、日の目を見た阿呆な文そのものに関する問題と、その阿呆な文を世に出した出版社の編集体制に関わる問題。「新潮 45」休刊に関する今回のコラムはその後者の問題について焦点を当てたものであり、そして僕は、後者の方がとても深刻だと思っている。

なぜならこの現代ではインターネットの発達によって、文章というものがこの世の中に氾濫していて、たった一日に、人が一生かけても読めないような分量の文章が溢れるように生まれつづけていて、だからこそ、“読むべき”文章を精査し、世に送り出す出版社の存在は、とても重要な役割を担っているからだ。

新潮社は、その役割を一部担えないということ、今回の事件を経て自他ともに認めることとなり、僕らは旗をひとつ失った。

そして、もうひとつ、僕は読者として反省しなければいけない、と思った。

“読むべき”文章なんて、お金を出して買ったことが無かったからだ。

新潮社も認める通り、今回の「駄文騒動」に直接的に通じる問題として雑誌の発行部数の低迷がある。

鶏と卵のどちらが先かということではあるけれど、僕らが読まないせいで、“読むべき”文章を作ろうとしていた雑誌が、ひとつ、なくなった。

今回の事件は、読者が発信者をひとつ追い落とした事件ではあるけれど、本来読者と発信者は同じ側に立つべきであって、できれば対立するべきではないと思う。

例えばいまの言論雑誌が腐ってしまっていたとしても、それは世の中で再生していくような価値があるのではないだろうか。簡単に、“鬼退治”してしまってよいのだろうか……？